

定理

本来のグリムの法則が説明する子音対応

	印欧語	ゲルマン語
第1系統 摩擦音化	<i>p</i>	<i>f</i>
	<i>t</i>	<i>θ</i>
	<i>k</i>	<i>h</i>
第2系統 無声化	<i>b</i>	<i>p</i>
	<i>d</i>	<i>t</i>
	<i>g</i>	<i>k</i>
第3系統 非帯気化	<i>b^h</i>	<i>b</i>
	<i>d^h</i>	<i>d</i>
	<i>g^h</i>	<i>g</i>

- 「唇」「歯」「軟口蓋」の3つの調音点を考える。
- 3つの変化系統と3つの調音点で9の音素の対応が現れる。

英語学習という観点から異なる語派に由来する語の子音字の対応を表すように改変したもの

		ギリシャ語	ロマンス語	ゲルマン語
第1系統 摩擦音化	法則①	<i>p</i>		<i>f</i>
	法則②	<i>t</i>		<i>th</i>
	法則③	<i>k / c</i>		<i>h</i>
第2系統 無声化	—	<i>b</i>		<i>p</i>
	法則④	<i>d</i>		<i>t</i>
	法則⑤	<i>g</i>		<i>k / c</i>
第3系統 非帯気化	法則⑥	<i>ph</i>	<i>f</i>	<i>b</i>
	法則⑦	<i>th</i>	<i>f</i>	<i>d</i>
	法則⑧	<i>ch</i>	<i>h</i>	<i>g / y</i>

- 音でなく現代英語の「綴り字」の対応を反映
- 上の表で */k/* の音を持っていたスロットには *<k/c>* の文字が入る
(*<q>* もあるが稀なので今回は載せていない)
- *<c>* の文字が入った結果、現代英語ではこれが */s/*, */k/* の音で実現することに注意
- 法則⑥⑦⑧は、印欧語から各語派に至るまでに、グリムの法則以降も様々な音の変化を被った結果を反映している
(特に法則⑦⑧は言語マニア向け)

演習（解説つき）

おなじみの単語、あるいは未知の単語を、子音対応を手がかりにつなげていく練習をしましょう。今回重要なのは、ここに出てくる単語のうち、**特定の 1 語を暗記することではなく、語派を超えて単語のつながりを捉える思考法を身につけることです**。知らない単語が出てきたら、まずは自分で意味を調べてみることをおすすめします。その際、表の同じセルに含まれる単語とどのように関連するか、そしてそれらが隣のセルの単語とどのように関連するか、まずは自分で考えてみてください。

未知の単語と既知の単語を結びつける練習のため、あえて基本語から高難度の単語を混在させています。辞書を引いて単語をノートに書いて学習することを強くおすすめします。

【注意】

今回は、文字の対応を見つけやすいよう、**形態素の先頭文字の対応のみを考えます**。形態素とは、意味と機能をもつパーツ(接辞や語幹など)の最小単位です。

例えば、unexpectedly という単語は、un, ex, (s)pect, ed, ly という 5 つの形態素から成ります。

以下に用語の曖昧な部分を定義しておきます。

- <□> は綴り字、/□/ は音素を表します。
- ラテン語とそこから派生したフランス語・イタリア語・スペイン語などを総称して、「**ロマンス語**」と呼びます。
- 語派の分類は、原則として古い方の起源を優先しています。

ゲルマン語がロマンス語に借用され、(いわば逆輸入の形で) 英語に入ってきた場合、元のゲルマン語の音(or 文字)が保たれている場合は、「**ゲルマン語由来の単語**」に含めます。古ノルド語由来の単語も「ゲルマン語系の単語」に含めます。また、ロマンス語を経由して英語に借用されたとしても、もともとギリシャ語起源でその音(or 文字)を保っている場合は「**ギリシャ語由来の単語**」に含めます。

【法則① 《p-f》関係】

p aternal, p aternity, p atriot, p atriotic, p atrimony; p atron	f ather
p edal, p edestrian, p edicure, e xpedite, e xpedition, e xpedient, p ioneer, p essimistic	f oot, f etter, f etch
p re-, p ro-, p ri m e, p ri m itive, p ri m ary, p remier, p ri m ate, p ri m ordial, p ri n ce, p ri n ciple, p ri s tine; p re s byter, p ri s t	b efore, f irst
p ort, p assport, i mport, e xport, c omport, d eport, p ortable	f are, f erry, f ord, f jord

グリムの法則の解説で真っ先に例に挙がるのは、ラテン語の **pater**「父親」と英語の **father** の対応です。

paternity「父性」、**paternal**「父親の」などのラテン語系の単語と英語本来語の **father** のつながりはわかりやすく、グリムの法則①を考える最初の例として言語学入門書の中でも定着しています。ギリシャ語系では **patrimony**「父から受け取る財産」、**patriarch**「家父長制」などの単語があり、また「父なる祖国」という発想から **patriot**「愛国者」、**patriotic**「愛国者の」といった単語も連想されます。フランス語系で **patron**「後援者」も英語としておなじみです。これらの単語の背景に **father** の響きを感じ取ることを忘れないでください。

pedal と **foot** のつながりもおなじみです。**pedestrian**「歩行者」、**pedicure**「ペディキュア」などは **foot** のイメージが非常にイメージしやすい語です。ゲルマン語系の同族語は **fetter**「足かせ」、**fetch**「取ってくる」などで、こちらも「足」とのつながりがイメージしやすいです。その他のロマンス語系同族語だと、**expedite**「はかどらせる」、**expedition**「遠足」、**expedient**「利益になる、はかどる」(いずれも、「足かせを外す(ex)」が原義。), **impede**「邪魔する<足を突っ込む」などです。フランス語系では **pioneer**「先駆者」なども同族語です。「足」→「一番下」となり、**pessimism**「ペシミズム<すべては最悪だとする考え」などもつながります。

pre-「前に」という接頭辞はロマンス語系の単語でおなじみですが、これは **before** などの **-fore** と同族語です。これを最上級にした単語は、ゲルマン語系で **first**「一番最初の<一番前」であり、ロマンス語系では **prime**「一番最初の、最上の」、**primitive**「原始の」などがあります。ここから「最初の」のニュアンスを含む語は多く、一例を挙げると、**primary**「主要な、第一の」、**premier**「一番最初の」、**primate**「(国教会)大司教」(※**primate**「類人猿」も同じ印欧語幹に由来する造語)、**primordial**「原始時代の」、**prince**「王子<最初に王位を継ぐ者」、**principal**「最上位の者」、**principle**「最上位の原則」、**pristine**「最初の状態の、汚れない」、ギリシャ系では、**presbyter**「(初期教会の)長老<年長者」、**priest**「聖職者<presbyterと同じ語源」などです。

port は「港」で、**import**、**export** はそのつながりで覚えた人も多いでしょう。もともとは「運ぶ」というラテン語 **portare** に由来する語群です。他にも **transport**、**passport**、**comport**「振る舞う<自らを運ぶ」、**deport**「強制送還する」、**portable**「持ち運びできる」など多数の単語に含まれます。これらがゲルマン語系の **fare**「運賃」、**ferry**「フェリー」とつながることを意識しておきましょう。ゲルマン語系では他にも **ford**「浅瀬を渡る」、**fjord**「フィヨルド」などの単語も難しいですが重要になってきます。

【法則② t-th 関係】

tent, tense, tend, extend, distend, ostensible, ostentatious, retain, detain sustain; tenuous, extenuate; tendon	thin
tort, torque, torsion, torture, tortuous, distort, extort, retort, torment, torture	thwart
tumor, tumulus; tomb	thumb, thigh, thimble, thousand
trio, triple, triangle, trinity, tribe; testament, testimony, detest, attest	three, third

印欧語幹 *ten-「伸ばす」に由来するゲルマン語は、**thin**「薄い<薄く伸びた」ですが、それに対応するラテン語系の単語が無数にあります。ラテン語系の英単語では **ten, tend, tain**「伸ばす、ぴんと張る、保つ」という語形です。**tent**「テント<薄い布を張ったもの」、**tense**「ピンと張った」、**tend**「傾向がある<行動が伸びていく方向」などが典型的な単語です。接頭辞がつくと **extend**「伸ばす」、**distend**「膨張させる」など。**ostensible**「見せかけの」や **ostentatious**「見せびらかしの」は、観客に対して(os-)薄い布を見せてショーを展開する様子から生まれました。薄くのばしたものを「保つ」という意味の -tain, -ten という語幹は、**retain**「保つ」、**detain**「拘置する」、**sustain**「保つ」に典型的に見られます。他にも **tenuous**「(関係などが)希薄な」や **extenuate**「罪、失敗を薄くする」に **thin** の面影を見ることも重要です。ギリシャ系だと **tendon**「腱<伸びる箇所」があります。同族語はここに挙げた以外にも無数にあるので、思いつくものをまとめて書き出してみてください。

ラテン語系では **tort** に「ねじる、ひねる」という意味があり、英単語 **tort** は「不法行為」というやや難しい意味になっています。**torch**「松明」は木をねじり上げてつくった聖火のようなものをイメージします。**torque**「回転を生む力、トルク」、**torsion**「ねじれ、トーション」は自動車好きにはイメージしやすい工学用語です。**torture**「拷問」も **torment**「ひどい苦痛」も人間をひねるようなイメージで捉えます。**distort**「歪める」、**extort**「強引に引き出す、絞り出す」、**retort**「言い返す<言葉をひねり返す」、**tortuous**「回りくどい、ねじれた」も重要です。これだけネガティブな単語のイメージがそろって、ゲルマン語系の **thwart**「挫折させる、くじく、妨げる」という意味も腑に落ちます。

印欧語幹 *teuə- は「膨らむ」です。ラテン語系では **tumor**「腫瘍」、**tumulus**「古墳、塚」で膨らんだ形状を視覚的にイメージできます。ギリシャ系では **tomb**「墓」です。これらがゲルマン語系ではもっと身体に根ざした **thumb**「親指<膨らんだ指」、**thimble**「指ぬき」、**thigh**「太もも」、**thousand**「千<膨らんだ数」と結びつきます。

three は他の語族では **tr-** に対応します。**trio**「トリオ、三重奏」、**triple**「三重の」、**triangle**「三角形」、**trinity**「三位一体」などは見ての通りです。**tribe**「部族」は、本来ローマ帝国の3部族のことでした。「第三者」→「目撃者」という意味になったラテン語 **testis** も同族語です。**testament**「証言、遺言」、**testimony**「証言」などはここに由来します。(test「テスト」はこれらとは別語源。) **detest**「ひどく嫌う」の原義は「証言を断る」で、**attest** は反対に「証言する、(第三者が)証明する」です。

【法則③《c/k-h》関係】

ラテン語では <c> は常に /k/ の音でしたが、英語では <c> の文字を /s/ と /k/ という2つの音で読みます。また、綴り字の <c> は口蓋化という音変化の結果、<ch> になることがあります。「音」が変化している場合は、「文字」を手がかりに単語のつながりを見いだすことです。

captain, capital, cattle, chapter, chef, chief, achieve, precipice, precipitate	head, headlong
cone	hone
catch, chase, capable, captivate, accept, except, receive	have, heavy
corner, unicorn, corneous	horn

ラテン語 caput「頭」は、**captain**「キャプテン」、**capital**「首都の；資本主義の」に典型的に見られます。cap-を英語の **head**(<古英語 heafod)と結びつける思考を身につけてください。**cattle**「家畜、牛」と **capital** は実は同じラテン語に由来する二重語で、中世には家畜こそ資本であったことが想起されます。<c> が口蓋化して <ch> になったバリエーションでは、**chef**「シェフ」と **chief**「チーフ」が同じフランス語が別の時代に入ってきた二重語です。**achieve**「達成する」はフランス語 à **chef**「終わって(<頭のところまで来て)」に由来。**precipice**「絶壁、張り出した崖(<pre 前 cip 頭)」や、**precipitate**「真っ逆さまに落とす；突然引き起こす」は **headlong**「真っ逆さまに、まっしぐらに」という本来語と共鳴する部分があります。

cone「円錐」と **hone**「(刃物など)を研ぐ」は語頭の子音のみのシンプルな対応ですが、「とがらせる」というイメージが共有されるのがわかります。グリムの法則を適用すると、このように短くて分解不可能な単語でも、異なる語派とつなげて考えることが可能になることがあります。

ラテン語の動詞に habere「持っている」というものがありますが、これは英語の **have** とは語源的に関係ありません。グリムの法則によると英語の /h/ に相当するのはラテン語の /k/ ですので、**capere**「取る、捕まえる」という単語が have と同族語ということになります。**catch** や **chase** はこの単語に由来する語が別の時代に入ってきた二重語です。**capable** は「能力を持っている」と考えると have の響きを感じられます。**captivate**「魅了する<心を捕らえる」、**accept**「受け入れる」、**except**「を除いて」、**receive**「受け取る」などもこの仲間です。同族語は多いので、他にも調べてみましょう。ゲルマン語内では **heavy** が have の仲間、「多くのものを持っていて重い」という発想で理解します。

英語本来語で「角」は **horn** です。horn には「(楽器の)ホルン」や「クラクション」の意味もあり、「角笛」のように合図を発するものをイメージできます。ラテン語ではそのまま **corn-**ですので、**corner**「角<とんがった場所」、**unicorn**「ユニコーン<uni 1 corn 角」などが理解しやすいです。**corneous**「角質の」などの難単語も角のイメージから連想ができます。余談ですが、日本発祥の「コロネ」というパンがあります。和製語ですが、あの形も角(**cornu**)のイメージがあります。

【法則③の発展形《qu-wh》関係】

*kw- という祖語の音はラテン語では、<qu-> の綴りで現れ、ゲルマン語では <hw> で対応します。グリムの法則本来の /k/-/h/ の対応を反映している規則的な対応です。英語では、<hw> の綴りは古英語以降、文字の順番を入れ替えて（「音位転換」といいます）、<wh> の綴りになりました。

question, quest, inquire	what
quiet, tranquil, acquiesce	while

英語の疑問詞は wh- で始まりますが、スコットランドなどの一部の地域では /hw/ という発音が見られるように、古英語では軒並み <hw-> という綴りでした。そう考えると、ラテン語の疑問視 qui「誰」、quod「何」とのつながりが見えてきます。**question, quest, inquire**「尋ねる」といった単語に、“**what, where, why?**” などのつながりを感じ取れるようになると一流です。

ロマンス語系では「休む」という意味から、**quiet, tranquil**「静謐な」、**acquiesce**「黙認する」などがあります。ゲルマン語系では休息の「時間」ということで、**while** に対応します。

【法則④ 《d-t》関係】

d ecade, d ecimal, d ecimate, (d ozen)	t en, -t een, (t wo)
d ental, d entist, d andelion, i ndent; o rthod d ontics	t ooth
d edicate, i ndex; d eixis, d eictic; d ictionary, p redict, d ictate, b enediction, j uris d iction; a bdicate, i ndicate; j udge, p re j udice	t each, t oken
d ermatology, d ermatologist, e pidermis	t ear[v]

ten はラテン語では **decem** です。**decade**「10 年間」に **ten** の響きを感じるのは難しくありません。他では、**decimal**「10 進法の; 少数の」、**deciliter**「デシリットル=10 分の 1 リットル」など。**decimate**「数を激減させる」は「10 人に 1 人をくじで選んで殺す」という行為に由来します。**dozen**「ダース」はラテン語 **duo-decem**[=**two-ten**] から来ていて、2 も 10 も《d-t》が対応するこの法則が当てはまります。

ロマンス語系の **dental**, **dentist** と英語本来語の **tooth** は同族語です。英語では、このように、しばし他言語に観察される <n> が脱落します。**dandelion**「タンポポ<ライオンの歯(葉がライオンの歯の並びに似ているから)」や **indent**「へこませる; インデント(字下げ)する」なども歯形のイメージが浮かびます。ギリシャ系では **odon** という綴りで現れるので、**orthodontics**「歯科矯正<ortho 正当な **odon** 歯)や **orthodontist**「歯科矯正医」が重要です。

印欧語幹 *deik-は「示す、威厳を持って宣言する」です。ゲルマン語系では **teach** ですが、この語の古英語での意味は「示す」で、その名詞のバリエーションが **token**「印<示すもの」です。ロマンス語系の **indicate**「示す」や **index**「索引<場所を示すもの」とこれらをまず結びつけます。ギリシャ語系では **deixis**「直示、ダイクシス(どこで・誰がなどを示す代名詞や副詞)」、**deictic**「直示的な」という専門語に現れます。ラテン語では **dicere**「言う<言葉で示す」を表す最も一般的な単語であり、**dictionary** をはじめとする無数の単語に現れます。**predict**「予言する<前もって言う」、**dictate**「はっきりと命じる; 書き取らせる」、**benediction**「祝福<bene 良い **diction** 言葉」、**jurisdiction**「司法権<juris 法」、**abdicate**「退位する<ab 離れて」、**dedicate**「捧げる<特別のものだと示す」などまだまだあります。**judge** も「正義、法(ju)を述べる(dge)」という組み合わせで、**prejudice**「偏見<pre 前 **judice**[=**judge**]」なども仲間です。

英語本来語の動詞 **tear**「引き裂く」は、ギリシャ系で **derm-**「皮膚」という語幹につながります。皮を剥ぐイメージからつながりを捉えてください。**dermatology**「皮膚病学、皮膚科学」、**dermatologist**「皮膚科医」は意外によく目にする単語です。他の専門語は **epidermis**「表皮<epi 上の **dermis** 皮」など。

【法則⑤ 《g-k/c 関係》】

g elatin, c ongea l , g el, j elly, g lacial, g lacier	c old, ch ill, c ool
g entle, g enial, g enteel; g enerate, g enital, p regnant, g enesis, g enetic, g enome, g eneration, g ender, g enius, g enocide, g enealogy, nature, native, innate, renaissance	k ind, kin , k indred, k inship, k ing
r ecognize, c ognition, inc ognito, diag nosis, n ote, con note, n otice, n otion,	k now, k nowledge, a cknowledge, can , c unning, unc outh

ゲルマン語由来の **cold/cool** と、口蓋化が起きた **chill** は同族語です。ラテン語では **gelare**「凍る」という動詞が対応し、派生語は **gelatin**「ゼラチン」、**congeal**「(液体が)凝固する」、**gel**「ジェル(状のもの)」です。<g> の文字がフランス語や英語では /dʒ/ の音になりますが、文字から **cool** との対応を読み取ってください。**jelly**「ゼリー」は **gelée**「ジュレ」というフランス語を英語に取り入れた後、発音に合わせて <g>→<j> と綴り直しました。**glacial**「氷の ; 氷河の」、**glacier**「氷河」も「凍る」のイメージから結びつきます。

印欧語幹 *genə-「生み出す」に由来する英単語は大量にあります。まずは、「生まれつきの(気立てのよさ)」に由来する **kind** と「良い出自の」に由来する **gentle** というおなじみの単語をしっかりと結びつけてください。そのつながりが見えると、**genial**「愛想のいい」や **genteel**「上品な、上品ぶった」に **kind** の響きを感じることができます。<gen><gn> 「生む」の意味で、ロマンス語系では **generate**「生み出す」、**genital**「生殖の」、**pregnant**「妊娠中の<生み出す前の>」、ギリシャ語系では **genesis**「起源 ; 創世記」、**genetic**「遺伝子の」、**genome**「ゲノム」など。ゲルマン語系では「生まれ」が **kin**「血縁、氏族」、**kindred**「親族」、**kinship**「親族関係」という意味に現れ、その関係性の頂点が **king**「王」でした。ラテン語系で同じ時代に生まれた人のグループを **generation**「世代」といい、同じ性のグループを **gender**「ジェンダー」と言います。特出した生まれの人物は **genius**「天才」です。民族全体を消し去る蛮行は **genocide**「ジェノサイド、民族浄化」で、生まれの系譜は **genealogy**「系譜学」です。**gn-**で始まる単語は発音のしやすさの関係で、<g> を落としたものもあります。**nature**「生まれたままの状態」、**native**「生まれた国の」、**innate**「生まれつきの」、**renaissance**「ルネサンス、再生」などに「グリムの法則」はもはや綴り字上でも見るができなくなっています。

印欧語幹 *gno-「知る」も重要です。**can** は古英語では「知っている」で、そこから「やり方を知っている→できる」となりました。現在分詞形 **cunning** は「狡猾なくよからぬ方法を知っている」となっています。**couth** は **can** の過去分詞に由来し、否定辞のついた **uncouth**「粗野なく礼儀を知らない」の方が重要です。**know, knowledge, acknowledge**「認める<ac[=on]>」もおなじみです。ギリシャ語・ラテン語系では、<gno> あるいは <g> が脱落した <no> が「知っている」を表します。**recognize**「認識する<見たことあるものを再び知る>」、**cognition**「認知」、**incognito**「名前を変えて<知られないように>」、**diagnosis**「診断<病気をはっきりと知ること>」、**note**「気づく」、**connote**「含意する<共に気づく>」、**notice**「気づく」、**notion**「概念」などが有名で、他にも多数あります。

【法則⑥ 《ph-f-b》関係】

印欧語の帯気閉鎖音は各語派で、それぞれ別の音(or 文字)に変化します。ギリシャ語系とロマンス語系でも違う音(or 文字)になるので、別々に表記します。ギリシャ語系の同族語が英単語にない場合も多いですので、マニア以外はギリシャ語の列は参考程度にとどめておくとよいでしょう。

ギリシャ語系	ロマンス語系	ゲルマン語系
metaphor, euphoria	transfer, suffer, offer, differ	bear, bring, birth, burden
	flower, floral, flora, flourish, flour, folio, foliage	bloom, blossom, blood, bleed, bless
	flame, flagrant, conflagration, flammable, flamingo	blaze, blond, blind, blend, bleach, bleak, blemish, black
	refute	beat, bat, battle, debate, rebut

印欧語幹 *b^her-「運ぶ」はゲルマン語で、**bear**「運ぶ、生む<子どもを運ぶ」に現れます。**bring, birth, burden**などの日常語もこの仲間です。ラテン語では <f> に対応し、**transfer**「運ぶ」などに典型的に現れます。**suffer**「苦しむ」などは、**burden** を背負った苦しみと共鳴するものがあります。**offer**「相手の元へ運ぶ」、**differ**「異なる<離れた場所に運ぶ」などもおなじみです。ギリシャ語系では <ph> の綴りで現れ、**metaphor**「メタファー<考えを運び伝える暗喩」、**euphoria**「至上の喜び<この上ない気分運ばれていく」などがあります。

flower(フランス語由来)と **bloom**(古英語由来)と **blossom**(古ノルド語由来)は同族語だと意識することが重要です。いずれも「花開く」という印欧語幹に由来します。ロマンス語系では **floral**「花の(ような)」、**flora**「植物相」、**flourish**「花開く、繁栄する」などが重要です。**flour**「小麦粉」と **flower** は同じ発音ですが、もともと同じ単語で 18 世紀まで綴りの区別すらなかったのですが、やがて書き分けられるようになりました。ぱっと開くのは「葉」も同じで、**folio**「2つ折りの紙<葉」や **foliage**「(集合的に)葉」も同族語です。ゲルマン語内では、「ぱっと開く」→「ほとばしる」→「血」と意味を変化させ、**blood, bleed, bless**「祝福する<血で生け贄を捧げる」と結びつきます。

印欧語幹 *b^hel-「輝く、閃光が走る、燃える」からは色や炎に結びつく単語がたくさん派生しています。ラテン語系の **flame**「炎」とゲルマン語系の **blaze**「(強く輝く)炎」を結びつけましょう。ラテン語系の仲間は **flagrant**「目に余る、露骨なく燃える火のように目につく」、**conflagration**「大火」、**flammable**「燃やせる」、**flamingo**「フラミンゴ<燃えるような色をした鳥」などです。ゲルマン語系では「燃える」→「輝く」のイメージから **blond**「金髪の」が生まれ、強すぎる光は色彩を失わせ、**blind**「盲目の」、**blend**「混ぜる<境目が見えなくなる」、**bleach**「漂白する」、**bleak**「荒涼とした<焼け跡」へとつながります。焼け焦げると小さい黒い跡が残り、**blemish**「汚れ、染み」、**black** もこれらの仲間です。あまりに強い光は、色彩の喪失、そして光を吸い尽くす黒へとつながるのは、なんとも語源の面白さを物語っています。

beat は英語本来語で「打つ」で、**bat**「(野球の)バット」、**battle**「戦い<打ち合うこと」、**debate**「討論<意見を戦わせる」などはロマンス語から借用されましたが、元はケルト系だとする説が濃厚で、今回は学習の都合上ゲルマン語系に入れています。**rebut**「論理的に反論する」と **refute**「誤りを証明する、論破する」は意味も似ている難単語ですが、「打ち返す」という発想で共通する同族語であることがわかります。

【法則⑦ 《th-f-d》関係】

法則⑦では、ロマンス語系の文字が法則⑥と同じく<f>で現れます。法則⑥と⑦だと、⑥の方が多くの単語の関係に表れるので、こちらの法則⑦はやや優先度は下がります。今までのところで不安がある人は、一度法則①から⑥までをしっかり復習してから進む方がいいでしょう。

theme, hypothesis	synthesis,	fact, feat, -fy	do, deed, indeed, doom, deem
		figure, fiction, feign, feint	diary, dough, lady
		fume, perfume, obfuscate	dizzy, doze, dust, down, duvet, deaf, dumb
		fabric, fabricate, forge	deft, daft

印欧語幹 *d^he-「置く」は各語派で最重要の基本語として生まれ変わります。ギリシャ語系では **the-**で「置く」の意味が残り、ラテン語系では **facere**「する、作る」で、英語では他ならぬ **do** になります。ギリシャ語系では **theme**「テーマ<置かれたもの>」、**synthesis**「合成<syn 共に thesis 置く>」、**hypothesis**「仮説<事象の下に置かれた考え>」、**parenthesis**「括弧<周りに置かれたもの>」などです。ロマンス語系だと、**fact**「なされたこと」、**feat**「偉業」、**-fy**「〜化する」などが基本で、ここには書き切れないくらい多くの単語に現れます。ゲルマン語では、**do** とその名詞形 **deed**「行為」、**indeed** [=in **fact**]、**doom**「置かれた運命」と **deem**「〜だと考える」などです。

印欧語幹 *d^hegh- は生地をこねて何かを「形作る」作業です。ゲルマン語系では **diary**「チーズ、バターなどを作る場所；搾乳場；酪農の」、**dough**「生地」、**doughnut**「ドーナツ」はアメリカでは **donut** の綴りも一般的です。ラテン語系では **figure**「姿<形作られたもの>」、**fiction**「フィクション<作られたもの>」、**feign**「ふりをする<偽の姿を作る>」、**feint**「見せかけ、フェイント」などを覚えておきましょう。雑学的ですが、ゲルマン語系の基本語 **lady** も古英語 **hlafdige**「パン(hlaf)をこねて形作る人(dige)」が縮まって生まれた単語です。

印欧語幹 *d^heu-は「雲の中にいるようなぼんやりした状態」を表します。ラテン語では **fumus**「煙」があり、**fume**「激怒する<頭から煙を発する>」、**perfume**「香水<煙のように漂う香り>」などがあります。ラテン語 **fuscus**「薄暗い、ぼんやりとした」からは、**obfuscate**「ぼやけさせる」が重要です。ゲルマン語だと、**dizzy**「目がくらむ<輪郭がぼやける>」、**doze**「うとうとする<意識がぼやける>」、**dust**「ほこり<空気をぼやけさせるもの>」、**down**「羽毛、ダウン」、**duvet**「羽毛(掛け布団)」、**deaf**「耳が聞こえない<音がぼやけた>」、**dumb**「愚かな<もの理解がぼやけた>」などがあります。

ラテン語 **faber**「職人」は何かを織りなすプロのことで、**fabric**「布地；織り方」、**fabricate**「でっち上げる<嘘の物語を織りなす>」、**forge**「ねつ造る」になりました。ゲルマン語では、職人の手先に目を向け、ポジティブな意味の **deft**「器用な」とネガティブな意味の **daft**「夢中になりすぎた、愚かな」があります。

【法則⑧ 《ch-h/f-g/y 関係》】

このグループも法則⑦と同じく上級者向けです。古英語の綴り字 <g> は /g/, /j/ の音で発音されており、現代英語では /j/ の半母音は <y> で書くようになりました。また、ゲリシャ語系では <ch> は /k/ の音価です。

charisma, eucharist	exhort, hortative	greedy, yearn
xenophobia	host, hospital, hostel, hostage, hostile	guest
alchemy	fuse, refuse, confuse, profuse, fusion	gut, gust, gush
chasm	hiatus	yawn, gape, gasp

印欧語幹 *g^her-「好む、欲する」は子音対応の学習にもってこいです。ゲルマン語系では **greedy**「貪欲な」や **yearn**「非常にほしがる」(<古英語 giernan)にはっきり本来の意味が現れます。ラテン語では **hortari**「強く求める」になり、そこからよく使われるのは、**exhort**「熱心に勧める、促す」で、**hortative**「奨励の；要求話法の」は難しい専門語の響きがあります。ゲリシャ系では **charis**「恵み、好み」というポジティブな意味になり、**charisma**「カリスマ<神に恵まれた能力」、**eucharist**「聖体祭」に引き継がれました

印欧語幹 *g^hosti- は語源学の世界では有名な語幹で、原義は「見知らぬ人；もてなしを受ける、与える関係にある人」といった意味です。**host**「主人」と **guest**「客」は「もてなし(**hospitality**)を与える/受ける人」という関係で、同じ単語に由来するのです。**hospital, hostel**「ホステル」、**hostage**「人質(ある意味ではもてなしを受ける人)」、**hostile**「敵意のある<見知らぬ人に対する」も同語源です。ゲリシャ語系では **xeno**-「見知らぬ人、異国の」となり、英語では語頭の <x> を [z] と発音します。**xenophobia**「外国人嫌い」などです。法則⑧では、このようにゲリシャ語系・ロマンス語系の語彙対応は統一的にはいかない部分があります。

印欧語幹 *g^heu-「勢いよく注ぐ」に由来する語は、ゲルマン語系で **gut**「腸<消化物が注がれる場所」で、この単語は、「ガッツ」という日本語にもなっているように、「本能、直感；根性、決断力」のような全身に注ぐエネルギーといったニュアンスを含みます。**gust**「一陣の風」、**gush**「(液体が)どぼどぼと流れ出る」もこの仲間です。この語幹のラテン語系語彙では <f> で対応し、**fuse** に「注ぐ」の意味が出ます。**fuse**「導火線<電気を注ぐもの」、**refuse**「断る<注ぎ返す」、**confuse**「混乱させる<一緒に注ぐ」、**profuse**「豊富な<前にあふれ出る」、**fusion**「融合<液体を注いで混ぜ合わせる」など多くの単語に見られます。注ぎすぎて空になったら、**futile**「無駄な、中身の無い」です。ゲリシャ系では、**alchemy**「錬金術<鉄を溶かして混ぜて合金を作る」が連想できます。

印欧語幹 *g^hai-「あくびする、ぽっかり開く」は、古英語本来語では **yawn**「あくびをする」(<古英語 geonian)があり、古ノルド語由来では **gape**「口を開けてあけにとられる」、**gasp**「息をのむ」があります。いずれも生理現象を表す日常語です。ラテン語系では **hiatus**「断絶、中断」というフォーマルな語ですが、ぽっかり間が開く感じがはっきり残ります。ゲリシャ語系でも **chasm**「裂け目、亀裂」に印欧語のイメージがしっかり引き継がれています。